

会報
おおいた

俳人協会大分県支部

発行所
俳人協会
大分県支部

発行人
俳人協会大分県支部
代表者
小松生長
事務局
大分市高崎3-13-14
神足方(かみあし律)
(題字: 江田 居半)

郵便局振替口座番号
01740-3-24968
俳人協会 大分県支部

予期せぬ事態の中 新たな活動を



大分県支部長 小松生長

予想だにできなかった新型コロナウイルス感染症拡大のため、第29回大分県支部総会、並びに俳句大会を中止といたしました。皆様にはすでにお知らせいたしましたように「総会資料」をお届けし書面形式でのご審議を経て無事議決を戴きましたことをここで確認いたしますとともに、

事前募集句のみの大会に変更しました。3月末に締め切られた

490句の投句の中から選者の中西夕紀先生にご選句いただき例年通りの入賞者が決定、結果は2〜3頁に載せていますのでご覧下さい。応募した方には作品集をお届けしました。

中西先生には来県されることを楽しみに、会員の方々も講演に大きな期待を抱いていたのですが非常に残念なことになってしまいました。そんな状況に中西先生は皆さんの期待に副うべく、お忙しい時間を割いて特別に講評の執筆、さらには入賞句

も増やしていただきました。ここに厚くお礼申し上げます。また改めて来県の機会がありますことを心より願っています。

このような事態は会員の皆様方にとっても初めてのことであり、改めて私共の俳句活動は健康と平穏な日常あつてのことと、思い知らされました。

なお支部の慶事といたしまして顧問の穂好樹菟男さんが協会名誉会員とられました。令和2・3年度の支部新役員も決定、こんな情勢の中ですが役員



—令和2〜3年度役員一同(ほか欠席3名)—
第1回役員会を7月10日、コンバルホールで開催
①秋の吟行俳句大会 ②来年の九州俳句大会(大分)などの議題を話しました。①はP3に記載

一同さらに皆様方のお役に立つよう頑張つてまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

行事計画につきましては、○秋の吟行俳句大会 ○俳人協会第15回九州俳句大会準備 ○大分県支部「30年史」発行など大きな行事が控えています。コロナウイルスのためまだまだ先行きは定かではありませんが一つ一つ皆様方のご理解を得てやっけて行くつもりです。ご参加ご協力よろしくお願ひします。

第二十九回俳句大会成績(募集句)

特選

潮満ち来春の光を押し上げて

大分市 豊東美智子

準特選

二人して剥いてふたりの豆御飯
朴咲いて空に摺まり立つ子かな
我れ立ちし影と見紛ふ蝌蚪の群

別府市 古賀 宣道
大分市 金澤 諒和
大分市 渡辺セイ子

入選

春光を蹴りて米寿の逆上がり
沈みゆく日ざしかがよふ糸ざくら
海霧深き岬の先や活断層
初蝶のまだ濡れてゐる一匁
天職を母にもらひて毛糸編む
先導の白バイ二台風光る
ほほ笑みもことばのひとつ桃の花
歌留多とり字の読めぬ児が一番に
低空の鷹を見たりし大枯野
雲の峰組体操の立ち上がる
由布岳の裾を踏まへて蕨摘む
麦の芽の縮目縮目を列車過ぐ
大由布に糸里正して麦青む
水甕の水面一枚春寒し
三極や樹間は光うばひあふ

別府市 甲斐 梶朗
大分市 花本 公明
大分市 豊東美智子
大分市 睦ほたるこ
別府市 竹光 直子
大分市 佐藤 一男
大分市 猪原アヤ子
別府市 吉弘 久美
国東市 斎藤 典子
白杵市 益 美智子
大分市 黒木 豊
大分市 木下 恕子
大分市 阿部 正調
日出町 大蔵 和子
大分市 阿部 正調

中西 夕紀 選

選評

特選

潮満ち来春の光を押し上げて

豊東美智子

春の満潮時間は夕方の4時30分頃ですから、渚から見ると、ちよつと水分を含んで重くなつたように見える春の光を、力強く押し上げるように、潮が満ちて来たという光景です。誠に大柄な美しい句です。春駘蕩とした海の景色を、気分よく謳い上げています。

準特選

二人して剥いてふたりの豆御飯

古賀 宣道

仲睦まじいご夫妻の様子が伺えます。仲良く食事の支度をし、仲良く食べるという、静かな幸せが描かれています。二人して」ということに、信頼関係が見えるようです。

朴咲いて空に摺まり立つ子かな

金澤 諒和

中七の「空に摺まり立つ」というところが眼目の句です。近くのを摺んでやつと立っていた子が、摺まるところがなくとも、立っていられるようになった姿を、温かく見守つて居るのです。朴の花という、高く咲く花の季語を使ったところに、この子の成長を祈る気持ちを見ることが出来ます。

我れ立ちし影と見紛ふ蝌蚪の群

渡辺セイ子

水に映つた自分の影かと思つたほど、縦長の大きな蝌蚪の群だつたというのです。蝌蚪の群の分量を表しているわけですが、自分と同じ大きさに驚いている作者が、如実に表されています。

選を終えて



中西 夕紀



大会の選を終えてまず感じたことは、風景句にしても人事句にしても、明るいくよかなものに出会ったという喜びでした。その中から光景が鮮明に見えて、作者の感動が素直に伝わってくるものを特選、準特選にしました。

風景句では、雄大な山河をドラマチックに描いた作品が多いのに感じました。惜しくも選外になった作品の中にも、山焼の句など面白い作品がありました。大らかな風景詠から、まだ見ぬ大分の山河の美しさを羨ましく思いました。

人事句では、家族の情愛が描かれている作品に、優れたものがありました。普段の生活を大切に行っている姿勢を見るようでした。そして何より、気取らないふんわりとした温かみが滲み出ている作品に魅かれました。

また、四季を通して、日や光に注視した作品に、感性の豊かさを思わせるものが多くありました。正直に言って、入選句が十五句しか採れなかったのが残念でした。あと十句は採って、作者の皆さんにお会いしたかったです。

採りたかった句

- 逝きし日の農婦の母へ穀雨かな 大分市 今村 悦子
- 源流の小さき鼓動や風光る 別府市 堤 節子
- 野火走る九重連山けぶらせて 大分市 黒木 豊
- にぎり飯野焼後皆は煤顔で 大分市 辻嶋 玲子
- 缶蹴りの記憶の向かう秋夕焼 大分市 光成 えみ
- こんもりのしだれ桜をつたふ雨 大分市 友永 章子
- 春障子母を二度呼ぶ父の癖 大分市 岩波千代美
- 山焼く火湯の町の空奪ひけり 大分市 市ヶ谷洋子
- みどりごの大きな欠伸つづみ草 豊後大野市 加藤 賢二
- 落雲雀青きみ空の風つれて 由布市 佐藤 豊治
- 阿蘇五岳一望にして揚雲雀 別府市 亀田多珂子

特選をいただいて (募集句)

潮満ち来春の光を押し上げて

豊東美智子



この度は「都市」主宰中西夕紀先生の特選を頂き、まことに有り難うございました。

この句は大分合同新聞わさだタウン教室の兼題「光」で作った中の二句です。今年二月に夫に先立たれ、何も手につかない状態のとき友人の方々に気遣っていただき前向くことができました。気晴らしに佐伯から佐賀関の日豊リアス式海岸の一般道をドライブし癒されました。道の駅「佐賀関」から海辺へ降り、ひねもす寄せる波音に耳を預け、広い海原や光つて碎け散る波をぼんやり眺めていてこの句を授かりました。俳人協会の締切りが迫っておりましたので、とりあえず出してみようか位の軽い気持ちで投句しました。特選という結果に私が一番驚いています。早速夫にうれしい報告ができました。このような時傍らに俳句があつて精神的支えとなり救われました。一歩踏み出そうとした途端、コロナで句会は全て休会になり出端をくじかれました。これからは自分なりに研鑽を積み、できるところまで続けたいと思います。

事前募集句は、会員九十名、一般六十一名の計百五十一名から投句を頂きました。投句総数は四百九十句でした。コロナ禍拡大の不安な毎日の中でお寄せ下さり有難うございました。選者の中西夕紀先生には、選句と共に丁寧な句評、講評もお寄せ下さりご指導頂きましたことお礼申し上げます。いつの日かお目にかかれる日を楽しみにしています。(編集部記)

お知らせ

今年の秋の吟行俳句大会は事前募集句のみとして、当日句会は中止します。後日、案内状をお送りします。

ようこそ俳人協会へ

令和元年度新会員



芋岡勝一
(水輪)

俳句との出会い

学生時代、思い出にと、日記に俳句を添書きし楽しんでいましたが、就職を機に俳句と遠ざかってしまいました。

退職後故郷臼杵に帰り、「トキハ文芸教室」はじめての俳句教室」にお世話になり、草本美沙先生のご指導を受け十数年になります。その間に「水輪」へ入会、又故東恭生先生のお世話にもなり、臼杵南山句会のお仲間にも入れていただきました。

臼杵は昔からその時々々に連歌、俳諧、俳句が盛んな土地です。沢山の句碑があり、臼杵石仏、公園、歴史の道、臼杵湾沿岸と吟行に恵まれた土地柄で、俳句に親しむ者にとって魅力的で素晴らしい所です。未永く俳句ができればと思っておりますところ、この度、皆様のお

仲間に入れて頂くことになり、有難く思っております。宜しくお願ひ致します。

若竹の風呼び風を放ちけり

勝一



猪原アヤ子
(蕨の里)

心に残る絃文先生との出会い！

私は、いけばなや大菊作り等していたので俳句をしたと言えず迷っていましたが、寛大な夫の了解を得て、平成3年4月から、南大分公民館の久保青山先生の句会に入会。先生はすぐに「蕨」の句会を進めて下さり、四日市のお取越し句会に初めて参加。その時絃文先生に初めてお会いしました。特選十句の披講があり、最後にこの人には三重丸をあげたいと言っ

て「水口の開けっ放しの冬田かな」の句はどなたですか？と問われましたので、私が「アヤ子」と返事すると、「猪原アヤ子さんですか？」とフルネームで呼ばれたのでびっくりしました！後で分かったのですが、青山先生が今度新人らしからぬ新人が入会したと私の事を話したと知りました。

90歳を過ぎましたが俳句を友として余生を送りたいと思っています。

野球児のこゑまで日焼してをりぬ

アヤ子



吉賀京子
(水輪)

俳句と私

小学校長となり、「一校一特色」に俳句を取り入れたことが俳句を始めるきっかけとなりました。

週一回の俳句朝会で先人の句に触れたり、季語を考えたりする中で、児童も先生方も素晴らしい句を詠むようになり、全校児童の句集「川登讃歌」ができました。ま

た、当時発行されていた児童句集「豊つ子」の倉田絃文選で表紙を飾った「つぼみから椿の花が生まれそう」という六年生児童の句は多くの事を教えてくれました。

児童と共に自分も句を詠み始め、日常生活の中に新たな発見や感動が感じられるようになりました。

退職後、句会に入会。多くの方々の句に接し、俳句の奥深さや素晴らしさを感じている日々です。

鶉飼火の闇際立てて水馴棹

京子

風涼し布地を滑る裁鉄

京子



堀越和子
(露の里)

四季の山々

故郷に帰って二十年、しばらくは山歩きばかり楽しんでいました。が膝を痛めてからは山登りが出来なくなりました。

そんな時、新聞の文芸欄の俳句に目がとまるようになりました。以前、汗を拭き拭き登りついた雄大な山、径の途中で癒された草花を詠んだ五七五をみつけ「なるほど」「わかる、わかる」とその情景を思い出し俳句に魅了されて挑戦を決めました。

七十才の私の勉強は徒歩で通える教室が条件でした。近くの文化教室に入会させていただき「露の里」の古賀宣道先生の丁寧な指導をいただきながら、ベテラン揃いの仲間と学ぶ楽しさも教わりながら勉強しております。

雲の峰棚田の水にたちあがる

和子

村山真砂
(露の里・百鳥)

久住山

俳句を始めたのは、子どもが中学の時でした。PTAの有志で続けた読書会の担当の先生から「真砂さん俳句をしませんか」と誘われたのがきっかけでした。そして平成八年に「百鳥」に入会しました。同人になったのは平成十六年です。大阪に住んでいたので、大阪句会を中心に神戸、京都、奈良の句会や吟行に行きました。

平成二十九年八月に五十年以上住みなれた大阪を離れ、SJR大分に入居しました。その年の十一月、「大分合同新聞日曜俳句バス」の行先が久住山ということに惹かれて一人で参加しました。講師は「露の里」の阿部正調先生。初めての私を参加者の皆さんが暖かく迎えて下さり、当日の句会も楽しかったです。翌年三月から「露の里」に入り、現在に至っています。

雁渡し流木白く積まれあり

真砂

岩男美代子
(露の里)

初めての二句

三十数年の大阪生活に終止符を打ち故郷へ戻ってきました。しばらくして地元の夏山句会に誘われ二句で参加しました。(本当は七句だったのですが新入の私への配慮でした。)それが私の俳句へのスタートです。

やがて大分の「露」句会に参加するようになりました。句が選ばれる事はほとんどありませんでした。正調先生に一句だけ選ばれた事がありうれしくてうれしくてその句は生涯忘れることは無いと思います。絃文先生亡き後は「露の里」句会に参加するようになりましたが「えらいこっちゃ」「句ができへん」の連発でした。気付けば俳人協会にも入会していました。

正調先生の句評をすっかり聞き先輩の方々の名句を目標に続けていきたいと思っています。

生命のこの指止まれ敗戦記

美代子

佐々木紀昭
(少年)

俳句への取り組み

私の俳句作りは職場の先輩に「少年」への入会を勧められたことがきっかけです。十二年が経ちましたが、一向に腕が上がりませんが、奇数月発行の「少年」への投稿が主で年に数十句という少なさなもので、致し方ないのかもしれませんが。

還暦を過ぎての記憶力は覚束なく、季語や語句の読みや意味を調べながらの句作りです。兼題には乏しい実体験を思い出しながら作るものの、発想がなかなか浮かびません。生きてきた時間の濃さが影響しているのでしょうか。

今後は、コロナ禍ではありませんが、新しい生活様式とやらを取り入れながら、気持ちに張りを持って生活していこうと思っています。

アカクラゲ心拍数はアンダンテ

紀昭



樋口通子
(路の里)

俳句の力

当時大分市に住んで居ました。俳画が好きで大分合同新聞の文化教室に通ったのです。次第に自分の俳句を取り入れたく興味を持ち始めたのが俳句を始めさうかけになつた様に思います。その内両親も老いてきましたので宇佐に移住することに成り、そこで俳句教室に入会する事が出来て嬉しかった事を思い出します。まもなく親の介護が始まりましたが次と今もなお老々介護となりましたが夫の介護に寄り添はざるを得ません。振り返りますと何時も介護をしていた様になります。何度も俳句を止めなければならぬかと思つたことがあります。止めさらず今に至つています。私にとつて俳句は日々忙しく苦しい時でも俳句を作るといふ目的があったことは何処かで元気に繋がっていたのかもわかりません。これからも健康で続けられる事を願っています。どうぞ宜しくお願い致します。次の句は介護の時のひとこまでです。

起こさるるたび月仰ぐ看取かな
通子



金澤諒和
(澤・花鶏)

子ども達と共に

大分合同漢字博士となり、漢検一級を取得し、次に何を極めようかと思つて始めたのが俳句でした。伯父の山本健人、豊東美智子さんの手ほどきを受け、俳句の世界に没頭するようになり、現在は小澤實先生主宰の「澤」、野中亮介先生主宰の「花鶏」の同人として活動させて頂いています。

また、小学校に勤務していますので、子ども達に俳句を教えることを生きがいとしております。昨年は、勤務校が「俳人協会第五十八回全国俳句大会ジュニアの部」において、学校賞を受賞しました。子ども達と共に、今後も楽しく俳句を詠んでいきたいと思つます。

皆様、今後とも宜しくお願い致します。

あめつちに定めしあぎとろ始
諒和



平山 藍
(路の里・水輪)

ご縁をいただいで

令和元年度に入会のお話をいただき、ありがとうございます。これまでを振り返ってみると、生活に追われ俳句から遠ざかったことがありました。そんな折に「待っていますよ。」「出してくださいね。」等の励ましをいただきました。その度ごとに再びペンを執り投句のみの参加でしたが続けることができました。私が今日あるのも温かい交流の中で助けていただいたお蔭です。

導いてくださった先生方のお言葉を、時あるごとに復唱しながら句作りをしています。「実景かな?」「人生を詠め!」「何度読んでも飽きのこない作品を」等々、胸に刻んでいます。これからも皆さまと一緒に磨きの時間を過ごせることを楽しみにしています。

分校の子等の案山子のよく笑ふ
藍



四浦 鳩
(路の里)

出会いをありがとう

高校時代に俳句と倉田紘文先生に出会い、縁あって中学校の教師となり、教え子に平和と人権を説き、テニスや俳句をしました。思い出の一つはその昔、紘文先生とあのNHKホールのステージに立ったこと、それと津久見市の四浦半島、イルカ島の駐車場に行けば十二人の子も達と詠んだ句碑が建つてることです。今は野津町や佐伯のお年寄りの皆さんと句を詠み、大分の「路の里」の皆さんの句会に参加して修行を積んでいます。俳句を通じて多くの皆さんとの出会いをありがとう、そして、乾杯!皆さん、長生きしましようね。

その人もくちなしの香もなつかしき
鳩



謹んでご冥福をお祈りします

追悼 藤原香雲氏

秋篠 光広

平成二十六年の春に上木された第二句集「続豊後梅」は「秋惜しむ波郷全集読み余す」の句で締めくくられている。この句集は米寿の記念にとあとがきがあるが、昭和二十八年に「鶴」入会とあつて、波郷選を受けた自負がこの末尾の句に籠められていよう。入会後の精進ぶりは昭和五十四年「鶴」同人・昭和六十二年「鶴」賞受賞されたことでも伺える。「鶴」は波郷亡き後石塚友二・星野麦丘人・鈴木しげをと主宰が変わるが、その間の九州における「鶴」同人として結社句会のお世話また俳人協会県支部の役員としてのご尽力など長老としてよく面倒を見ておられた。

県支部が平成二十四年に発行した「支部二十年史」の百字随想を紹介すると、真玉町（現在豊後高田市）に八坪余の小さな藁葺の木草庵を俳人藤原款冬老が建てたのは昭和二十六年秋であるからもう六十有余年経ている。当時数年間はこの庵で俳句会が度々開かれた。私の俳句

の原点であるこの庵を今後も守り続けたい、とある。款冬氏が昭和三十年に亡くなられてから香雲さんが木草庵二代目を継承され保存されていた。款冬氏は昭和二十八年、石田波郷が「鶴」を復刊すると同時に同人となったと書いているが、その庵で香雲さんは俳句にのめりこんでいったのである。当時石田波郷の存在にはまぶしいものがあり、地方にあつてはなおさらのことで、現代俳句に何か新しい可能性を期待させるカリスマ性があった。

地下足袋のこはぜ外して花筵

普段、農作業に明け暮れていた青年香雲が雪月花の世界に足を踏み入れた瞬間である。この句がはじめて石田波郷選で認められたことで香雲さんはどれだけ力強く嬉しく思ったことか。この句は波郷の抒情を受け継いでいる。県下のみならず直接波郷選を受けたことのある数少ない一人でもあった。ご冥福を祈るばかりである。

令和元年十二月十七日逝去。行年九十四歳。

東 恭生先生を偲んで

芋岡 勝一

昨年十二月十日句会の最中に訃報が入り、臼杵南山句会役員の皆さんが駆けつけた事を鮮明に思い出す。体調を崩されて入退院を繰り返されていたが、お見舞いに伺つて間もないだけに、皆さんの落胆は一入であつた。

昭和七年生まれ、教職に就かれ、平成五年臼杵市立市浜小学校校長退官、市の教育指導員や各種役員を歴任した。教育一筋の人であり、享年八十七歳であつた。

趣味は俳句を始め読書、書画蒐集、登山、旅行と多岐に亘り、何時も奥様の明美先生（奥様の趣味も俳句）とご一緒されており、愛妻家であつた。読書家だけに語彙の豊富さには皆驚くほどである。更に、抜群の記憶力の持ち主でもあつた。会員の句を諳んじて、句会でそれを引用指導され、驚かさ

れた事も度々であつた。又、吟行旅行をした折りに、遅くまでお酒を酌み交わし俳句談義をされ、豪放磊落な面も持ち合わせていた。

俳句歴は先生勤務の学校の校長で、臼杵路句会の主宰でもあつた

荒巻伸毅先生（俳号大愚、平成四年より九年間大分県俳句連盟会長を務めた）との出会いである。大愚先生の自宅を訪ねた折に句座が開かれていて、そのまま臼杵路句会と「路」に入会した（恭生先生曰く「昭和五十六年（一九八一年）の真夏の夜の夢のような始まりである」）。大愚先生は平成二十一年（二〇〇九年）に亡くなられたが、その間二十八年多大な影響を受けられた様である。俳句以前の心構えから作句指導は勿論、教師としても教えを受け、「われひと共によりよく生きる」を人生のテーマとされたのも大愚先生との対話の中から生まれたとおっしゃつていた。海外旅行等もよく共にした。余談であるが二人ともよく酒席を共にし、いろいろと教えを受けたとの事である。

大愚先生が俳句の第一線を引かれた後、恭生先生が臼杵路句会主宰を引継がれ、臼杵句会に至つてい

る。又、南山句会の前身は臼杵市が大愚先生を招いて「臼杵公民館俳句教室」を開いた事に始まる。恭生先生が主宰を引継がれ「臼杵俳句愛好会」更に「南山句会」と改名、多くの俳句愛好者を

指導した。更に、白杵市観光協会と提携し、倉田紘文先生を選者に迎え、「白杵俳句大会」を開催、平成二十九年で終えたが、十三回を見えなくなっていった。白杵市や県南地区の俳句の発展に貢献した。

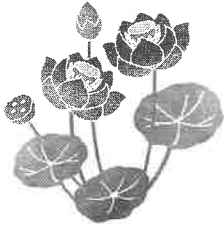
葬儀は教育、俳句、行政関係、地区の方々等多岐に亘る弔問者で溢れた。「公益社団法人俳人協会大分県支部」や「俳誌水輪主宰阿部王一」の花輪も飾られ、白杵南山句会徳永榮子会長が弔辞を述べ、会員の弔句が詠まれ、厳かに執り行われた。

昨年先生とご一緒した「大分県社会福祉協議会主催第二回おおいた大句会」の思い出の句を添え、ご冥福を御祈りし筆を置きます。

姫島の空ひろげけり夏の蝶

恭生

令和元年十二月十日逝去。行年八十七歳。



首藤勝二さんを悼む

秋篠 光広

首藤勝二さんが亡くなった。まだ信じられない思いで、いまだに悲しみを抱えたままである。勝二さんの俳歴は二十歳代に水原秋櫻子に師事するところから始まる。

「馬酔木」の後英で、新樹賞受賞するなど期待され、時の福永耕二の薫陶も受けた。東京での生活から大分市に帰郷してからは大分県馬酔木会「坂」で活躍。秋櫻子没後は堀口星眠の「椽」に移籍、椽新人賞を受賞する。その後「椽」を離れることになり「梟」に移るが、終生、水原秋櫻子を面影に見た俳句人生だった。私は折に触れ水原秋櫻子の直系としての作家論を書くべきだと勧めていた。勝二さんが一番「馬酔木」の真髄を理解し、実作されていたのだから、勝二さんの秋櫻子論が読みたかったのである。しかしながら、数年前から心臓の病気により体調が思わしくなくなってきた。ご本人の無念さを思うと胸が痛むのである。

平成四年の春だったか、当時市役所に勤務されていた勝二さんを訪ねた。俳人協会の大分県支部を

立ち上げようと相談に行つたのが氏との交流の始まりだった。むろん名前は存じていたが、席を同じくしたことは一度か二度程度の面識だった。しばらくして、勝二さんから電話があり、中津の「沖」のグループから同様の話があるとのこと、この事案は一気に進み、何回か世話人会を開いた後、平成四年九月十七日に協会員三十一名で支部を発足することができた。支部の実務を勝二さんと二人で数年行つた。またその後も勝二さんは副支部長として長きにわたり支部の重鎮としてよき相談役を担い亡くなるまでご活躍されたのは皆さんご存じの通りである。そんなこともあって、私どもの「朝鳥」句会に出向いて来られるようになった。句座を共にするようになった。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

火の国の火の山迫り大桜

勝二

令和元年十一月十一日逝去。行年七十六歳。

◆編集後記◆

▼今年の今頃は、予定では東京オリンピックの開催で活気に満ちた日本になる筈でした。スポーツの魅力に世界中の人々が沸き立っている筈でした。▼ところが、降って湧いた新型コロナウイルスのため、オリンピックの開催は来年初に延期され、大相撲や野球なども史上初という無観客での開催。高校生は最後の頂点を目指して切磋琢磨したことが、夢のように消えてしまいました。子ども達は学校に行けず、社会全体が「自粛」の日常を余儀なくされました。このような一年になると年初に誰が想像できたでしょうか。▼人類は感染症との戦いを繰り返してきたといえます。出口が見えない現在、それでもあちこちで俳句を始めたと伝わってきます。新たな日常とともに支部の活動もまた新たな視点で始めてゆきたいと思えます。

(編集部記)

俳人協会大分県支部
会報「おおいた」第四十一号
令和二年八月一日発行
発行人 俳人協会大分県支部
編集人 小松 生長
かみあし律
事務局 千八七〇一〇八七二
大分市高崎三二一三一―四
かみあし律
印刷所 〇九七―五四六―二九三四
楸大分出版印刷